

「いいだ人形劇フェスタ」のいま

原田雅弘 (高34回)

飯田では1979年から40年以上人形劇のお祭りが続けられています。そして、長年の積み重ねの中で、「いいだ人形劇フェスタ」は、国内最大、世界でも有数の規模を持つ祭典に育ちました。今回はそんなフェスタの概要と地域における意義などについて話したいと思います。

「いいだ人形劇フェスタ」の誕生

フェスタの前身である「人形劇カーニバル飯田」(以下カーニバル)は、国際児童年であった1979年に産声を上げました。子どもたちに生の文化に触れさせたいという飯田市の想いと、全国の仲間たちが集まり交流する場をつくりたいという人形劇関係者の想いが重なって生まれたのがカーニバルでした。今田や黒田などの人形浄瑠璃をはじめ、多くの伝統文化を大切に継承している地域であることも、このような祭典が生まれる土壌を形



「いいだ人形劇フェスタ」公式キャラクター「ぼお」の応援を受けて講演をする原田氏

私にとって、カーニバルの終了はこの祭典を市民が自らのものとして再獲得するチャンスに思えたのです。

この議論に参加した市民は、立場もカーニバルへの関わり方も様々でした。当然、議

論もすんなりとは進みません。それでも、毎日のように議論を重ねる中で、少しずつ現在のフェスタの基本が形成されていき、翌1999年には、市民主体の実行委員会による新たな人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」の誕生にこぎ着けることができました。これは、考えは様々でも、人形劇の祭典を続けたいという想い、その一点でみんながつながれたからこそ実現したのでしょう。

「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」

フェスタが生まれたとき、私たちはこのスローガンを掲げました。人形劇の現場は芝居を演じる劇人、観客、その場をつくり運営するスタッフ、この三者がいてはじ



●はらだ・まさひろ
飯田市砂払町出身。東北大学文学部を7年かけて卒業。その後帰郷、数年の修行の後、家業の砂払温泉入社。現在代表取締役。1992年より人形劇の祭典に関わり、2014年より「いいだ人形劇フェスタ」実行委員長。

成し、東京、名古屋と並んで飯田が主会場の一つとなった「世界人形劇フェスティバル」が開催されるなど、カーニバルは日本を代表する人形劇の祭典として成長を続けてきました。

そのカーニバルも、20周年を迎えた1998年に終了することになります。突然の報せに衝撃を受けながらも、秋を迎える前には、人形劇の祭典をなくしたくないと考える市民が集まって議論が始まりました。その時に私が考えていたのは、これは大変な事態ではあるけれど、同時に大きなチャンスでもあるということでした。

カーニバルは飯田市(教育委員会)と人形劇関係者によって運営されてきたため、市民が企画立案や運営に参画する回路は決して多くはありませんでした。そのような中で、市民ボランティアによるイベント広場の運営など、市民が主体的に参画できる場を広げようとしていためて成立します。フェスタ全体を見てもそれは同様です。それぞれの役割を果たすことで、参加するみんなが共に作るお祭り。それがフェスタなのです。この想いを分かちあうことで、参加する一人ひとりが主役となって輝ける場がつけられていきます。

子どもから年配の方まで、劇団もスタッフも、フェスタに参加する人は全員「参加証ワッペン」を購入し、身につけて参加します。これは、みんなが共にフェスタをつくっているという証です。このワッペンは共通チケットだと思っている方もいらっしゃると思いますが、基本はみんなが共にフェスタをつくるという理念を共有するシンボルなのです。

もう一つ、フェスタの特徴的な取り組みとして、市内の全公民館単位で行われる地区公演が挙げられます。この期間中には、中心市街地のみならず、市内全域で公演が行われます。その運営は、それぞれの地域の皆さんが主体的に行っています。地域の歴史や特色を活かした多彩な公演が飯田市全域で行われる。これこそが、みんなのお祭りとしてのフェスタの根底を担っています。

昨年、2019年のフェスタは、海外8劇団を含む331の劇団、1600人を超える人形劇人に参加いただき、6日間の会期中、市内全域および周辺町村145

の会場で446の公演が行われました。そしてこれらの公演や企画は、2108名のボランティアスタッフによって運営されました。これは国内では最大、世界を見渡しても有数の規模です。毎年開催されるフェスティバルとしては世界一かもしれません。

フェスタの意義

「人形劇を観たり上演したり、スタッフをしたり、どんなかたちでもフェスタに参加したことのある人は手を挙げてください」

飯田の中高生にフェスタについて話すとき、まずこの質問をするようにしています。すると大部分の生徒が手を挙げてくれます。これこそ長年にわたってフェスタがこの地域で実現してきた大きな成果の一つです。

40年以上続いてきたということは、親に連れられて人形劇を観ていた子どもが大人になり、親として子どもを連れてくるという循環が、3世代、家庭によっては4世



「いいだ人形劇フェスタ2019」お別れパーティー

さて、「人形劇」とはどのようなものなのでしょうか。

一言で言えば「表現媒体として『物』を使った演劇」です。物（人形）を使うことで、人間の身体ではできない動きを表現することができます。また、人が演じれば具体的に生々しく、刺激が強すぎるものも、人形劇なら比較的受け入れられやすいかたちで表現できる特性もあります。ヨーロッパなどで体制批判や社会風刺をテーマとする人形劇が演じられてきたのも、アジアで神の物語として人形劇が選ばれてきたのも、こうした特性に因るのではないのでしょうか。

人形劇は、抽象性の高さ故に観る者に想像力を要求します。表情の動かない人形が泣いたり笑ったりしているように見えるのは、演じる側の演技力と観る側の想像力が働くからです。そのとき、物にいのちが吹き込まれます。人形劇の現場とは、観る側と演じる側の相互作用によって、すべての物に「いのち」を見出す場であるといえるのではないのでしょうか。想像力を媒介として、すべてのものにいのちを見出し、参加する人みんなが「いのちの交歓」を分かちあう。それこそが「人形劇のこころ」であると私は考えます。

子どもたちにとって、いや、すべての人間にとって、いま最も必要とされる力は想像力のような気がします。

代にわたってつながっているということです。飯田の多くの家庭で、フェスタを通じて世代を超えた笑顔と感動の共有がなされている。これは他の地域には見られない素晴らしいことだと思います。

また、フェスタには多くの中学生・高校生がスタッフとして参加しています。中学生の頃スタッフとして参加した子どもが、大学生や社会人になってからも、フェスタの時期になると毎年飯田に戻ってスタッフとして参加する。そういう若者が何人もいます。彼らの多くは、できれば飯田に就職してフェスタのスタッフを続けたいと言います。残念ながら、今はまだその願いに応えられない環境が整っているとはいえませんが、彼らの存在は地域にとって大きな財産となるはずですよ。

ここ数年、各地域で地区公演を担う皆さんからも、「自分たちが楽しめる、主役になれる地区公演をつくりたい」という声が聞かれるようになりました。これまでは地域のために、子どもたちのためにという意識で関わってきた方々が、自分のものとしてフェスタを意識し、主体的な取り組みを始めています。これもフェスタの想いが幅広い層に浸透しつつあることの表れだと感じます。

「人形劇のこころ」とは

その力を豊かに育むためにも「人形劇のこころ」がいまこそ求められている。私はそう感じています。

先日、フェスタ2020中止の記者発表を行いました。40年を超える歴史の中で初めてのことですが、参加される皆さんの健康と安全を最優先で考えたためです。それを確保できる環境を整えることは困難であると判断したためです。毎年楽しみにしてくれている皆さんのことを思うと、言葉にならない想いがこみ上げてきます。しかし、「人形劇のこころ」とそこから育まれる力を信じ、この決断を踏まえて、フェスタは先に進まなくてはなりません。

最後に中止に際して発表したメッセージを引用して結びとさせていただきます。

「人形劇の力」を育み、その力を地域に、そして世界に笑顔や感動として届けたい。今一度、その想いをみんなで行きましょう。

子どもたちのために、人形劇のために、私たち自身のために、そしてみんなの未来のために。



「いいだ人形劇フェスタ2020」
幻のワッペン